

京都芸術大学（通学部）の教員養成に対する理念

本学は開設以来、我が国が今後更なる文化的発展と国際貢献を成し遂げようとする際、科学技術と経済理論だけではもはや立ち行かない岐路に立つ現代日本において、芸術文化の盛んな活動を通じて、日本の社会に生き生きとした創造的な力を与えること、またその活動を担う人材の育成をめざしてきた。そのため、芸術教育の高度化や国際的水準の芸術大学への発展を期して、芸術教育資格支援センターにおいても、芸術教育と研究の高度化を図るとともに、通信教育による芸術教育を実現し、芸術教育の普及と「芸術を社会に活かすことの出来る人材」の輩出に努めてきた。

本学教職課程においては、教員免許状の取得と共に、今日の多様な価値観の存在を認め、芸術・文化・社会・教育に対する幅広い知識と技術を養うこと、教員としての社会的役割と使命を明確にしたうえで、それらを主体的に実行することのできる教員養成をめざしている。また、「芸術」の社会的役割や、美術教育の意義を深く理解し、学校での教員としての実践力を身につけることを目標としている。特に生徒や一般市民の方とのコミュニケーション技術の習得など、現場での実践に即した能力の育成を重視し、これらの能力、技術に対して、芸術を介して社会に貢献する人材育成を実践するために、学科ごとに教員養成理念を設定し、科目を開講している。

各学科の教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画

・美術工芸学科

①学科の教員養成に対する理念あるいは目標

美術工芸学科は、「理論／実践」あるいは「制作／研究」といった枠組みを越え、総合的な芸術の力を基盤とした教員の養成を目指している。本学科では、油画、日本画、写真・映像、総合造形、染織テキスタイルなどの制作を中心とする教育と、アートプロデュース、文化財保存修復・歴史遺産などの研究および発信を重視する教育が交差する環境の中で、多様な経験と知見を積み、それらを社会や教育現場で柔軟に応用できる人材の育成を目的とする。

本学科が育成を志向する教員像は、以下のとおりである。

- ・美術工芸が持つ歴史的・文化的・社会的意義を正しく理解し、その価値を他者に伝えることができる教員
- ・展覧会、ワークショップ、地域や社会との連携活動などの実践の場を自ら企画し、責任を持って運営できる教員
- ・国際的視点と地域に根ざした視点の両方を持ち、芸術を通して新たな価値を創出し、より良い社会づくりに貢献できる教員
- ・専門的知識や制作経験を他者と共有し、人と人をつなぐ力を持ち、教育の場において人間性の育成に寄与できる教員

②上記を達成するための計画（教育課程、授業科目設定あるいは教育課程外での活動など）

美術工芸学科では、以下の能力の育成を教育課程および授業科目設定の中心に据えている。

- ・制作および研究に必要な知識や情報を、主体的かつ体系的に収集・統合する力
- ・多様な価値観と共に生きる社会において、他者への想像力と創造のための協働を通じて、知識や技術を的確に社会へ応用する力
- ・物事を学際的、分析的、批判的、かつ論理的に捉え、整合性のある理解を構築する力
- ・豊かな想像力と感性を活かしながら、専門的な分析・思考と結びつけて柔軟に発想する力

・「理論／実践」「制作／研究」といった領域の垣根を超えて、テーマや仮説を構想し、それを具体化する力

これらの力を涵養するため、学科の教育課程では、基礎的な技術と理論の修得から発展的な制作・研究活動に至るまで、段階的かつ横断的な学びを展開している。また、授業内外の活動を通じて、展覧会やワークショップ、地域連携プロジェクトなど実践の場を設け、教育的実践力の育成にも力を入れている。

・キャラクターデザイン学科

①学科の教員養成に対する理念あるいは目標

キャラクターデザインとはキャラクター自身が成長に向けて動きたくなる多面的な深層心理をデザインすることである。現実世界への視点（世界観）から探究された自らのテーマを、創造世界において世界像・キャラクター・ストーリーとして写像し、成し遂げたい未来の社会ビジョンを描くことを通じて、人間力と創造力を兼ね備えた人材育成を目標としている。そのために教員においては次の能力及び資質が求められる。

- ・現実世界に好奇心を呼び起こし、驚きから問いを育み探究することができる
- ・多様な価値観を認め合い、建設的な議論から新たな価値を生み出すことができる
- ・現実世界に向けた自らの価値観をテーマとして言語化できる
- ・自らの専門領域において表現技法と学術化の両面から研究制作することができる
- ・キャラクターデザインを基盤として領域横断的に新たな表現及び学問を創出することができる

②上記を達成するための計画（教育課程、授業科目設定あるいは教育課程外での活動など）

キャラクターデザインを新たな学問として位置付け「キャラクターデザイン論1-2」「社会探究」「進級研究・制作1」を基盤科目として設定し、学科全体で知見及び研究成果の共有を行うべく次の取り組みを推進している。

- ・科目横断的に学生の気づきが得られるよう情報交換と授業設計を行う
- ・授業録画映像を教員に共有し教授法の改善を推進する
- ・ルーブリック設計において、学生能力育成全体目標共有と各科目における能力育成役割の明確化を行う
- ・キャラクターデザイン研究会を定例開催し、各教員研究成果の発表共有を行い、学外発信を積極的に行う。
- ・キャラクターデザイン研究会に学外知見者を招聘し、先進情報の獲得及び、意外性のある学問領域も視野に共同研究を推進することでイノベーションを創出する。

・情報デザイン学科

①学科の教員養成に対する理念あるいは目標

情報デザイン学科では、社会や生活の中にある課題やニーズを捉えて分析し、魅力的かつ説得力のあるかたちで伝える力を育てる。グラフィック、イラストレーション、ゲーム、映像の4分野を横断的に学ぶ超域プログラムを通じて、多様なメディア環境に対応する創造力と実践的な表現力を養う。こうした力を活かし、社会的課題の可視化と提案によって社会に働きかける人材の育成を目指している。これらの知見と技術を教育に応用し、次のような教員の育成を目指す。

- ・社会やメディアの変化を捉え、表現を通じて伝える力を持つ教員
- ・多様な表現を通して、表現の楽しさと社会との関わりを伝えられる教員
- ・超域的な学びを基に、未来の社会に貢献する創造的な解決を提案できる教員

②上記を達成するための計画（教育課程、授業科目設定あるいは教育課程外での活動など）

情報デザイン学科では、社会課題や生活のニーズを捉え、それらを多様なメディアで表現・発信する力を育成し、教員としての資質・能力を養う実践的な教育課程を展開している。こうした教育の中で、以下の観点から教員養成に必要な力の育成を図っている。

〔観察力・構想力の育成〕

身の回りの事象に対する観察を通じて、多角的な視点と柔軟な思考力を養う。

〔超域的表現力と実践力の強化〕

多様な表現領域を横断的に学ぶ中で、社会や教育の課題に対する創造的な対応力を身につける。

〔プロジェクト型学修による課題解決力の育成〕

社会課題に対して主体的に取り組み、調査・発見・提案・協働といったプロセスを通じて、実践的な学びを積み重ねる。

〔キャリア形成の支援〕

教育の現場や社会との関わりを意識し、自らの専門性を教育にどう活かすかを考え、教職への意識と将来像を明確にしていく。

・プロダクトデザイン学科

①学科の教員養成に対する理念あるいは目標

プロダクトデザイン学科では、身近な道具、家具やモビリティなどのデザインから、企画やマーケティング、起業、アート思考まで、有形・無形を幅広く融合領域として捉える視点から、豊かな生活を提案する能力を身につける。それらを応用し、デザイン、芸術とその融合領域を生活に活かせる教員の育成を目指し、次のような目標を掲げる。

- ・デザインと芸術の視点から、芸術・美術教養をとらえ直すことのできる教員
- ・デザインと芸術と共に生活する楽しさや豊かさを伝えることのできる教員
- ・社会の未来の生活を豊かにする技術や創造力、発想力を教えることのできる教員

②上記を達成するための計画（教育課程、授業科目設定あるいは教育課程外での活動など）

学科で準備する科目では、課題発見力、発想力、想像力、構成力、表現力、造形力、コンピューター演習など最新のデジタルアプリケーションを教える科目で、基礎的なデザインから応用力、芸術的な視点とその融合的発想を磨くと共に、プロダクトデザイン総合演習などの総合的なデザイン演習科目を通して全体的なデザイン、企画、芸術を構想する訓練を行う。それらを通して、デザイン、芸術を生活に活かせる教員の育成という上記目標の達成を目指す。

・空間演出デザイン学科

①学科の教員養成に対する理念あるいは目標

空間演出デザイン学科では、社会における課題に対峙し、デザインを通じて解決すること、かつ、それによって新たな社会的価値の創出に取り組もうとする人材を育成する。そのために空間やファッション領域のデザインにおいて、基礎的な造形から実践的応用までを学び、さらにそれを社会に生かすべく自ら活動できる主体性や、人々と協働するためのコミュニケーション能力を養成する。それらの能力を総合的に発揮できる美術教員の育成を目標とする。

②上記を達成するための計画（教育課程、授業科目設定あるいは教育課程外での活動など）

授業カリキュラムでは、空間・ファッションデザイン基礎やデザイン表現基礎のようにデザインの手法や造形を基礎的に学ぶものから、社会の課題解決のデザインを行う応用領域と

しての学科授業など幅広く学ぶ構成となっている。また、教員にとって必要なコミュニケーション力も重視している。

・環境デザイン学科

①学科の教員養成に対する理念あるいは目標

本学の基本使命と建学の理念の中にある、他者の痛み想像力を働かせ、多くの人々の幸せのために、芸術的創造と哲学的思索によって新しい人間観・世界観を生み出すことを、教育の場で実践する教員を養成する。

「環境デザイン」は人間が生きる場のすべてを対象とする。そこに芸術的（美的）要素が付加されることにより生まれる、より豊かで潤いのある環境は人々を幸せへと導く。芸術大学における環境デザインの学びを通して、人々に幸せをもたらすものとしての美術教育に取り組んでほしい。

②上記を達成するための計画（教育課程、授業科目設定あるいは教育課程外での活動など）

「美術論」「美術史」と絵画、彫刻、工芸の基礎演習を必修によるコア科目として設定し、その上で学科教育の根幹として位置付けられている1～4回生までの必修の専門演習科目を履修させることにより、環境デザインの実践力、芸術の基礎的表現力、美術の基礎知識の3領域を総合的に身につけた教員の養成をはかる。

・アートプロデュース学科

（2014年度に芸術表現・アートプロデュース学科より学科名称変更）

①学科の教員養成に対する理念あるいは目標

これまで制作に重きをおいてきた日本の美術教育界は近年、鑑賞教育を行える教員を求めている。作品に意味を見出し、価値を付加していくことのできる主体的な鑑賞者（文化の享受者）の育成が、美術の未来のために急務だからだ。鑑賞力は制作する場合にも重要な能力だ。なぜならば、制作者は自分の作品の最初の鑑賞者だからだ。こうした美術教育界における鑑賞のニーズの高まりに応えられる人材育成を、本学科は目指している。

②上記を達成するための計画（教育課程、授業科目設定あるいは教育課程外での活動など）

「アートとは、作品と鑑賞者の間に起こる不思議で深遠なコミュニケーション。」「教育とはコミュニケーションなしでは成立しない。」こうした考えのもと、本学科では「みる、考える、話す、聴く」を駆使して、グループで鑑賞を行うACOP（Art Communication Project）」という必修授業を設けている。年間を通して行われるこの授業で学生たちは鑑賞能力を身につけ、そして作品と鑑賞者を結ぶファシリテーターとしての訓練も受ける。つまりACOPは「コミュニケーションを介した鑑賞教育」であり且つ「鑑賞を介したコミュニケーション教育」でもある。この授業を通して学生たちは観察力、論理的・批判的思考力、コミュニケーション力、セルフ・エデュケーション力を身につけ、同時に協働の重要さも学んでいく。さらにACOPの授業で学んだことを学外（美術館や他の教育機関）などで実践する場も多数設けている。

・こども芸術学科

①学科の教員養成に対する理念あるいは目標

こども芸術学科においては、次のような教員の育成をめざす。

- ・ 芸術の創造性を人間教育の根幹に位置づけ、芸術を通して子どもの人間性を育む教員
- ・ 子どもを取り巻く環境を深く理解し、ともに感性をひらき成長を支えることのできる教員

・健康や福祉の領域において芸術のもたらす効果を発見し、社会的意義を問いかけよりよい未来を築くために実践する教員

②上記を達成するための計画（教育課程、授業科目設定あるいは教育課程外での活動など）

1年次で保育の基礎理論を学び、さまざまな素材に触れながら造形表現の基礎を修得するとともに、身体感覚、身体的知を基盤としたアートワークを実践する。2年次では、子どもたちとのかかわりにおける「気づき」の力を育む。芸術のもつコミュニケーション力を媒介として、自然、環境、モノ、人間、地域といった多様な領域を総合的に学び、身体を通して実感する。3・4年次では、美術館、社会福祉施設、行政の地域活動、NPOなどの市民活動、地域の幼稚園や保育園と連携し、芸術を通じたコミュニケーションを実践する。特に4年次で希望する学生には、各種実習での体験をもとに「こども・芸術・教育」への関わりを深化させるテーマを設定し、学生の多様な進路のバックアップを行う。

これら一連の教育課程から、教職課程においては、芸術を通して人間の日常生活を見つめなおし、子どもの活動がいかに芸術活動と密接であるか、また分かちがたいものであるかを知るとともに、子どもたちへ芸術と共に生活、成長する楽しさや豊かさを教え、人間性を育む教員を育成することをめざす。

・歴史遺産学科

①学科の教員養成に対する理念あるいは目標

歴史遺産学は歴史遺産（文化財）の伝承を、作品や歴史事象自体を学術的研究によって評価し、保存修理に関する研究によって具体的に残す方法を模索する学問である。その実践＝伝承においては、広く社会の中で、歴史遺産（文化財）の重要性が認識され、人々がそれを頻繁に利活用する事が必要である。それを実現するには子供の頃から興味を持たせることが必須であり、学校教育の中でそれを伝える事のできる社会科および地理歴史科教員の養成を目指している。

②上記を達成するための計画（教育課程、授業科目設定あるいは教育課程外での活動など）

歴史遺産学科では日本史や世界史、地理をはじめとする講義、古文書演習や測量・実測演習などの授業科目を開講し、学生が歴史遺産（文化財）の伝承についての基礎を習得できるようにしている。特に、1・2回生では様々な歴史遺産（文化財）の歴史や様式について、3・4回生では演習や卒業研究を通して、それらを分析し、論理的に組み立て、的確に他者に伝えるための訓練を行っている。また、調査、保存修理の実践は東洋書画や民俗資料、考古遺物等に関する実践的課題に取り組むほか、日本庭園・歴史遺産研究センターの事業やその他のプロジェクトなどによって体験できる形を整えている。

・大学院芸術研究科

①教員養成に対する理念あるいは目標

芸術研究科の教育目標は、広い視野に立脚しつつ、個別専門領域のなかにテーマを発見・展開する能力を教授し、「理論研究と制作により新たな文明のパラダイムを構築する原動力となり得る人材」、「高度な専門性に加え、より広範な学識を有する創造性豊かな優れた学術研究者、芸術文化を多様に支える人材」を輩出することである。また、「芸術」の社会的役割や、美術教育の意義を深く理解し、「芸術を介して社会に貢献する人材」としての実践力を身につけることを目標としている。

美術の教科については、従来の絵画・彫刻などの個別分野における専門性の追究のみならず、複合的な視座から技法と思考を深め、それぞれの培った創造性と専門的伎倆を社会の中で展開応用できる教員を養成する。

社会・地理歴史の教科については、芸術に関する基礎理論に加えて、比較文化的視点や歴史的視点など、芸術文化を多角的に検証し、歴史的に継承されてきた有形・無形の文化財を構成する素材・技法の研究から、これらの背景にある時代や哲学、宗教、文化交流の足跡までを解明できる専門知識と分析技術をもった教員を養成する。

②上記を達成するための計画（教育課程、授業科目設定あるいは教育課程外での活動など）

芸術研究科では、芸術文化の基底となる考え方と研究の基本的道筋を学ぶ研究基盤科目群に加え、専門領域における「演習・研究」ならびに「分野特論」の履修によって、個別の専門性を深化させるとともに、領域を超えて学内外の専門家と協力してプロジェクト科目群を充実させることにより、各自の専門性を社会にどのように還元できるかを実践的に探究する機会を設けている。

また、学士課程開講科目の運営補助、課外での作品展覧会の実施、学術団体主催の研究会参加、インターンシップなど、現場での実践に即したコミュニケーション技術の習得を重視している。